

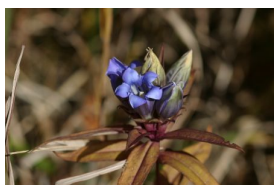
## 仙人通信 89 戸倉山 (1681m)

戸倉山は駒ヶ根 IC と千丈岳のほぼ中央に位置する山岳信仰の山で、中央高速伊那 IC 近くから、富士山の山頂に似た台形の山容が望め、伊那富士とも呼ばれている。

紅葉の進む静かな山歩きをしたく、戸倉山キャンプ場から山頂までのピストンをした。

駐車をしたキャンプ場のヤマモミジは、赤く染まり日の光にピカピカと輝き正に秋だ。登山道入り口には、猪や鹿を防ぐ為に通電した線が張り巡らされ、30cm 程の柱の間をすり抜け、入山する。登山道は直ぐに右に折れる。檜の梢越しに漏れてくる日の光で、足元の石英閃緑岩中の石英の結晶がチカチカと光る。石同士を当てて割って観ると、容易に割れてしまう程の密度の低さである。この地域は、中央構造線の北側に位置する領家帯だそう。せせらぎ沿いを5分程歩くと、尾根に向かう緩やかな九十九折の道となり、檜の林から唐松に落葉樹の混じった植生となる。その中にヤマモミジも赤く色付く。足元ではコウヤボウキや白いノギクが最後の花を付けている。又、黄色く色付いたコアジサイの葉が両サイド一面に彩る。躑躅に加え三つ葉躑躅が多く、花が咲いた春先の情景が目に浮かぶ。丸太で整然と整備された階段が始まり整備さに気落ちしたが、直ぐに終わりホットした(自然がいい!)。最初のベンチのある駒止めの松までが35分程で着く。イタヤカエデ・ヤマモミジ・ブナの黄葉・そして日の光に輝くクロモジも黄葉だ。足元では、水楢の大きなドングリが沢山転がり、その上に栗・水楢・捧等の葉が敷き詰められ、うっかりするとローラー状態となる。5合目の標識からは、唐松が主体で、風の音と共に粉雪のように落ち葉が舞い、顔に当たって来る。見上げると幹の頭部にのみ、葉を抱え、青空に映える。丸太を縦に割った3本のベンチからは、最初に空木・駒・乗鞍岳が望める地点だが雲が掛かり残念である。「猿の松」との太い松の近くで、本当の猿の頬笛が聞えて来たのは、偶然とはいえ可笑しい。四阿屋の近くに金明水との標識、塩ビのパイプからチョロチョロと滴る水を掌に溜めて、口に含む。周囲は草地在り、ドライフラワー状態の大きなアザミの花、そして2株のリンドウと会えて、嬉しさが込み上げた。スタートから1時間45分・赤松の林を登り詰めると不動明王等の板碑が祀られた西峰に着く。左手を振り返ると、雲塊を抱えた乗鞍・穂高・槍・白馬までが望める。山頂を東に廻ると白い北岳や農鳥が見える。他は梢が邪魔をする。避難小屋を横目に5分程で一等三角点のある東峰に立てた。眼下には、秋葉街道即ち中央構造線に沿って、長谷の部落や美和湖等が、又その先には甲斐駒・千丈・北岳・間の岳・農鳥と3000mの山が雪を頂き迫る。鋸岳と釜無の間に八つの編笠の頭も望める。高い山ではないからこそその素晴らしい景観だ。山頂には千丈岳の方向に向いた十蔵薬師如来の石像が安置され、奈良時代に行基により開山された、山岳信仰の山と由来書にある。約4時のピストンを終え車に戻ると滝周りから戻られた72歳の方が、「歳と共に老いるのはしょうがないが、その中に光る物を持って生きましようよ!」と含蓄のある言葉を、仙人に教えを乞うた気がした。帰路は漆の赤、そして唐松の緑から黄葉のグラデーションの山肌の秋葉街道を1時間掛けて諏訪まで、ゆっくりドライブし、去り行く秋を楽しみました。(h21.10.28)

金明水のリンドウ



東峰の山頂



北岳

